



「まだ生きたい」と強く願うことで、人の寿命は、もしかしたら延びるのかもかもしれません。介護職はほとんどの医療行為はできませんが、その方が人生に満足できるような支援をすることで、生きたいという「想い」をより強く引き出し、人生の終わりを先延ばしにできる。そのような可能性を感じた出来事がありました。

田中さん（仮名・女性）は八十七歳で、中重度の認知症があります。ご主人が亡くなってからは、マンションで一人暮らし。お子さんはいません。平日はユアハウスに毎日通い、スタッフは日常生活を支援するとともに、一緒に故郷の福島へお墓参りに行ったり、夏

「生きたい」想い通じた

には泊まりがけて海に行ったりもしました。

「私はこの世の中が大好きなんだ。だから死にたくない。長生きしたいよ」

田中さんはふとした瞬間によく言っていました。そして「私の周りには良い人ばかり。ユアハウスに来られるのも、私は運が良いからだよ」と続けるのです。

しかし今年二月、ユアハウスで過ごしているときに田中さんの体調が急変。顔色が悪くなり、息苦しそうに「体が熱い」と訴えて、救急搬送されました。救急車の中では一度、呼吸が止まりそうになりました。搬送先の医師からは、敗血症性ショックで危篤状態だと告げられました。

その日から私たちは、毎日のようにお見舞いに行きました。「今日がお別れの日かもしれない」という思いを隠しながら、田中さんはたくさんのチューブにつながっていました。

私は病室で質問しました。「退院したら一番にしたいことはなんでしょうか」

「ユアハウスで働きたい。即答でした。田中さんはユアハウスに働きにきていますと、ご自身では思っていたのです。「ユアハウスに絶対に

帰りたい」という言葉からは、「まだ人の役に立ちたい」という強い意志を感じました。

それからは、お見舞いに行くたびに体調が良くなっていきました。「私はどこも悪くないんだから、ユアハウスに帰してほしい」と言うようになり、一カ月後には奇跡的に退院できるまでに回復しました。

退院してからはユアハウスに泊まり、少しずつ元の生活を取り戻していききました。以前から毎日のように行っていた和菓子屋さんで買い物をしたり、美容室に行ったり、仲良しのご近所さんとお話をしたり…。

歩行ができない状態での退院でしたが、約一カ月後にはつたい歩きで自力で歩けるようになりました。何度かスタッフと一緒に日中に自宅へ帰り、一人暮らしを再開するための課題も見えてきました。スポンの上げ下ろしを一人でできるように練習を重ね、自宅に手すりを付け、帰宅の日を迎えました。

六月には、入院前から望んでいた熱海への温泉旅行に行く予定です。田中さんが最期までこの世の中が大好きでいられるように、私たちは支援し続けます。

（森近恵梨子 介護士・二十六歳）

◇ 小規模多機能型居宅介護事業所「ユアハウス弥生」（東京都文京区）のスタッフが、介護の実践を報告する。

■次回は六月二十八日掲載



「持病を治した自慢の食事を食べる田中さん」